

〈論文〉

不確実性下における平等主義、優先主義およびレクシミン原則
Egalitarianism, prioritarianism and the leximin principle for uncertain prospects

森 統
MORI Osamu

本稿では、不確実な結果の見込み(これをプロスペクトと呼ぶ)に関する社会的評価関係を形成する理論のうち、平等主義、優先主義およびレクシミン原則について考察する。優先主義について、本稿では Rabinowicz (2001, 2002) や McCarthy (2006, 2008) に基づいて議論を展開するが、我々は、事後的優先主義は、パターナリズム的な要素を含むと解釈できること、また、McCarthy (2006, 2008) の結論とは反対に、事前的優先主義はむしろ受け入れにくい提言を招きかねないことを指摘する。そして、我々は、プロスペクトに関するレクシミン原則について、優先主義の議論を敷衍するかたちよりも適切な、事後的観点からのレクシミン原則の考え方を示す。

キーワード 社会的評価関係、事前的優先主義、事後的優先主義、プロスペクトに関するレクシミン原則

1. はじめに

社会状態の評価判断を形成する理論において、重要な論点の一つは厚生配分や所得分配の平等に対する関心である。一般に、功利主義は、平等に対し無関心であるとして非難される。功利主義に対抗し、平等に対して一定以上の関心を払う規準としては、平等主義、優先主義あるいはレクシミン原則が挙げられる。

平等主義は、平等に対して固有の価値を認め、その実現を最重要目標とするものである。これに対して、優先主義は、その注目すべき議論展開の立役者ともいえるべき Parfit (2000)

によれば、「ある人々の境遇が悪ければ悪いほどそれらの人々に便益を与えることは一層重要である」(p.101)とする考え方である。言い換えると、境遇の悪い人々に対する便益はより大きなウエイトが与えられるべきだというのが優先主義の立場である。優先主義は、平等主義とは異なり、平等自体には価値を置かないと説かれてきた。それゆえ、平等主義に対しては、平等化を目標とするがゆえに境遇のよい個人の厚生水準を境遇の悪い個人の水準にまで引き下げる平等化を不当にも支持することになるとする、いわゆる水準の引き下げによる平等化批判 (the leveling down objection) が向けられるが、優先主義に対してはこの批判は当たらないとされる¹⁾。そして、Parfit (2000) によれば、Rawls (1971) の格差原則またはマクシミン原則やその発展型であるレクシミン原則は優先主義の極端な場合に位置づけられる (pp.116-7)。しかし、後節で明確にするように、優先主義が他者との相対的な比較とは独立に個人の厚生の絶対的水準に応じてウエイトづけされるものであるとすれば、最低厚生水準を他者の厚生水準との比較のうえで同定するレクシミン原則は優先主義とは一線を画すものである。

これらの規準の特徴については、これまでは、不確実性の存在しない状況を前提にして論じられることが多かった。不確実性のもとで得られる結果の見込み (以下ではこれをプロスペクトと呼ぶことにする) に関する評価のための規準の考察は、Broome (1991) により展開され、特に優先主義について、Rabinowicz (2001, 2002) や McCarthy (2006, 2008) により詳細に論じられた。プロスペクトを評価判断の対象とする場合、事前的観点と事後的観点の2つの観点が存在し、優先主義の場合、事前的優先主義と事後的優先主義に分かれる。Rabinowicz (2002) は、事後的優先主義について考察し、事後的優先主義は、Broome (1991) のいわゆる個人的よさの原則 (the principle of personal good) に反するが、これは、優先度のウエイト (priority weights) をプロスペクトの道徳的 (moral) 評価に限ると解釈することで容認できると論じている。

一方、McCarthy (2006, 2008) は、事後的優先主義が一人の個人しか存在しない社会において社会的評価判断と個人的評価判断が一致しないという困難をもつことを重視し、事後的優先主義は擁護できないとするが、反面、事前的優先主義は擁護可能と主張する。ただし、事前的優先主義が受け入れられるのは、分配上の観点ではなく、事前において公平なくじを支持するという観点からである。

本稿では、事前のおよび事後的優先主義の特徴について、Rabinowicz (2001, 2002) や McCarthy (2006, 2008) の議論を踏まえ、検討する。我々は、McCarthy (2008) の指摘

する、事後的優先主義の上述の難点に関連して、事後的優先主義にはパターンリズム（温情主義）の要素が含まれていると見るができると考える。また、事前の優先主義には、McCarthy (2006, 2008) が認識しているよりも大きな問題が含まれていると我々を見る。結論として、事前の優先主義は結果の状態にあまりに配慮を欠くことになりかねないのである。

本稿の後半では、プロスペクトを評価の対象としたレクシミン原則について考察する。そこでは、優先主義と同様に、事前の観点と事後的観定のそれぞれの観点によるレクシミン原則を検討し、事後的な観点からの適切なレクシミン原則の考え方を示す。

本稿の議論は以下の流れにしたがって論じられる。2 節では、全体にわたる議論の諸前提を記すとともに、事前の観点と事後的観点について平等主義を例として取り上げてそれぞれの見方を明らかにする。3 節は、事前の優先主義と事後的優先主義についてその特徴や問題点について検討する。4 節は、プロスペクトに関するレクシミン原則について論じる。最後の 5 節に結語的覚え書きを記す。

2. 事前の観点と事後的観点

社会には n 人の個人が存在するとする。各個人が直面する社会の（外生的）状況は t 種類だけ起こり得るが、各状況 $s(s=1, \dots, t)$ は p_s の確率で生じ、 s の状況で得られた結果を o^s とする。本稿では、 $s=1, \dots, t$ に対し p_s の確率で状況 s が生じ o^s の結果が実現する見通しを

$$x=[o^1, o^2, \dots, o^t; p_1, p_2, \dots, p_t]$$

と書き、プロスペクトと呼ぶ。対象とするプロスペクトは有限個であり、その集合を $X=\{x, y, \dots, z\}$ とする。ここで、結果は、外生的状況に対し、制度や政策、あるいはゲームのルールがどのように定められるかによって変わりうるとする。したがって、異なるプロスペクトは、社会が採用する制度や政策などの相違を反映したものとなる²⁾。

各個人が、結果 o^s に対して認めるよさ（goodness）の尺度を $g_i^s=g_i(o^s)$ とする。たとえば、結果 o^s は、ある一つの所得分配を示し、 g_i^s はその所得分配について個人 i が感じるよさを表している。この尺度は、正のアフィン変換を除いて一意に決まるとする。個人にとってのプロスペクトのよさの判断に関しては、Rabinowicz (2001, 2002) や McCarthy (2006, 2008) で想定されたように、Bernoulli の仮説が当てはまり、個人にとってのプロスペクトの価値は、 $g_i^s=g_i(o^s)$ の期待値で測られるとする。すなわち、個人 i にとって、プ

ロスベクトの価値は、 $\sum_{s=1}^I p_s g_s^i$ が大きいほど高い。

社会はロスベクトについてよさの評価関係 (betterness relation) を形成する (以下これを社会的評価関係と呼ぶ)。このロスベクトに関する社会的評価関係は反射性、推移性、完備性を満たす評価順序 (betterness ordering) であるとする³⁾。

この社会的評価関係の備えるべき性質のなかでも以下に記す個人的よさの原則 (the principle of personal good) は自然な要請である⁴⁾。これはロスベクトを対象にしているのでロスベクトに関する個人的よさの原則と呼ぶことにする。

ロスベクトに関する個人的よさの原則

2つのロスベクトが各個人にとって等しくよいものであるなら、それは社会において等しくよいと判断される。また、すべての個人においてロスベクトが他方のロスベクトと少なくとも同程度によく、かつ、ある個人にとっては厳密によいならば、前者は後者よりよいと判断される。

さて、ロスベクトのよさの社会的評価関係を形成する場合、事前的观点 (ex ante view) と事後的观点 (ex post view) の2つの观点がある。大雑把に言えば、事前的观点からの社会的評価関係の形成は、各結果のよさの個人的評価の期待値 (これがロスベクトのよさの個人的評価と見なされる) に基づいてロスベクトの社会的なよさの評価をする方法であり、事後的观点からの社会的評価関係の形成は、それぞれの状況において実現する結果のよさの個人的評価について社会的なよさの評価を与え、その期待値によってロスベクトを社会的に評価するものである。

ここでは、平等主義について事前的观点と事後的观点に分けて見てみよう。例1は、有名な Diamond (1967) による例を示している。

例1

	ロスベクト x		ロスベクト y	
	状況1	状況2	状況1	状況2
個人1	1	0	1	1
個人2	0	1	0	0

各状況の生じる確率はいずれも $1/2$ であるとする。表の数値は、それぞれの個人にとってのよさを測ったものであるが、議論をわかりやすくするため、以下では個人にとってのよさは単純に個人の厚生水準で測られるとしよう。プロスペクト x においては、個人 1 も個人 2 も期待厚生は、等しく $1/2$ である。これに対して、プロスペクト y においては、個人 1 の期待厚生は 1 であり、個人 2 の期待厚生は 0 である。期待厚生は、 x においては 2 人の個人で平等であるが、 y においては不平等となっているのがこの例の特徴である。事前的観点からの平等主義（以後事前的平等主義と呼ぶ）によれば、期待厚生が等しいプロスペクト x の方がプロスペクト y よりもよいということになる。

他方、プロスペクト x とプロスペクト y の両方ともが、いずれの状況においても結果的に個人の厚生は一方の個人が 1 で他方の個人が 0 となり、同じ程度の不平等が実現することになる。したがって、事後的観点によれば、2 つのプロスペクトは無差別であると評価される。

次に、McCarthy (2006) による例 2 を考えてみよう⁵⁾。

例 2

	プロスペクト x		プロスペクト y	
	状況 1	状況 2	状況 1	状況 2
個人 1	1	0	1	0
個人 2	0	1	1	0

例 1 と同様に、プロスペクト x においては、個人 1 も個人 2 も期待厚生は、等しく $1/2$ である。しかし、例 1 とは異なり、この例では、プロスペクト y においても、個人 1 も個人 2 も期待厚生は、等しく $1/2$ である。したがって、事前的平等主義によれば、2 つのプロスペクトは無差別である。

他方、プロスペクト x においては、いずれの状況においても一方が 1 だけの厚生を得るが、他方の個人の厚生は 0 である。これに対して、プロスペクト y においては、2 つの状況で厚生水準は異なるものの、2 人の個人の厚生は等しくなっている。事後的観点による平等主義（以後事後的平等主義と呼ぶ）は、事後的な平等それ自体に価値を置くので、プロスペクト y がプロスペクト x よりもよいことになる。

例 2 においては、各個人にとって、2 つのプロスペクトは同程度によいものであるが、事

後の平等主義は、 x よりも y がよいと判断するので、プロスペクトに関する個人的よさの原則を満たさないことに注意が必要である。

3. 事前の優先主義と事後の優先主義

優先主義は、Parfit (2000) に従えば、悪い境遇にある個人の厚生ほど高いウェイトを与えるべきだとするものである。すなわち、厚生水準が高くなるほどウェイトは低下してゆく。Rabinowicz (2002) は、この逓減的ウェイトを、より悪い境遇にある個人の境遇改善は、よりよい境遇にある個人の境遇改善よりも優先的に配慮するという意味で道徳的関心 (moral concern) を表したものだとした。

Rabinowicz (2002) によれば、優先主義のこの見解は、Rawls (1971) の功利主義に対する批判に應えるかたちになっている。Rawls (1971) は、功利主義は、一個人における利益と損失の補償の場合と同様に、ある個人の損失は、他の個人の利益により埋め合わせることができるとする点で、個人の個別性 (the distinctness of persons) を真面目に取り扱わないと批判した (p.27)。これに対して、Rabinowicz (2002) は、優先主義では、個人の厚生に逓減的ウェイトを用いることで悪い境遇にある個人の厚生の損失をよい境遇にある個人の厚生の損失で埋め合わせすることは強く制限されるので、Rawls (1971) の功利主義に対する反論に、優先主義は応えるものになっているとする。しかしながら、この主張は必ずしも明瞭なものとは言えない。なぜなら、優先主義における個人間の補償は、上で述べた制限的な効果とは裏腹に、他方で、よい境遇にある個人の損失を、悪い境遇にある個人の利益で埋め合わせすることはむしろ促進されるからである⁶⁾。

不確実な結果を含むプロスペクトに対して、優先主義にも事前の優先主義と事後の優先主義が存在する⁷⁾。事前の優先主義は、プロスペクトにおいて各個人が得るよさの期待値に基づいて優先度を与えるのに対し、事後の優先主義は、事後に実現するそれぞれの結果において各個人が得るよさに基づいて優先度を与えるものである。Rabinowicz (2001, 2002) や McCarthy (2006, 2008) に従い、ここではプロスペクトに関するよさの社会的評価関係は期待効用公理を満たすものと想定しよう。事前の優先主義と事後の優先主義の形式的表現は以下のように与えられる⁸⁾。

事前の優先主義 (ex ante prioritarianism)

任意の $g_i = g_i(o^s)$ に対して、厳密に凹の増加関数 w が存在して

$$\sum_{i=1}^n \sum_{s=1}^t w(p_s g_i(o^s))$$

がよさの社会的評価関係を表す。

事後的優先主義 (ex post prioritarianism)

任意の $g_i = g_i(o^s)$ に対して、厳密に凹の増加関数 w が存在して

$$\sum_{i=1}^n \sum_{s=1}^t p_s w(g_i(o^s))$$

がよさの社会的評価関係を表す。

これら 2 つの優先主義について、Rabinowicz (2002) による例を用いて特徴を明らかにしてみよう。2 人の個人に対して等確率で 2 つの状況が生じうる 2 つのプロスペクトが例 3 のように与えられるとする。

例 3

	プロスペクト x		プロスペクト y	
	状況 1	状況 2	状況 1	状況 2
個人 1	10	10	16	5
個人 2	10	10	5	16

例 3 では、プロスペクト x とプロスペクト y を比べると、状況 1 において、個人 1 の厚生は、x よりも y の方が 6 だけ高いが、状況 2 においては 5 だけ低い。対照的に、個人 2 の厚生は、状況 1 では x よりも y の方が 5 だけ低く、状況 2 では 6 だけ高い。

まず、プロスペクト x における各個人の期待厚生はいずれも 10 であり、プロスペクト y における各個人の期待厚生はいずれも 10.5 である。事前的優先主義によれば、個人 $i=1, \dots, n$ について厳密に凹の増加関数 w を用いれば

$$2w(10) < 2w(10.5)$$

となり、プロスペクトは y の方が x よりもよいと社会的に判断される。

他方、事後的優先主義は、結果として得られる各個人の厚生について、厚生水準の低いほど高いウエイトで評価することを主張する。したがって、それぞれの状況のそれぞれの個人の厚生水準に関する厳密な凹関数が想定される。両個人の厚生を評価する関数 w は厳密な凹関数であり、

$$w(10) - w(5) > w(16) - w(10)$$

であるとして。すなわち、同じ状況にある個人1と個人2について、一方の厚生損失が他方の厚生利得よりも重視され、よさの社会的評価の大きさに大きく影響する。このとき、状況1と状況2のいずれの状況でもそのように判断されるので、xがyよりもよいと社会的に判断される。

事後的優先主義について取り上げるべき3つの論点が存在する。第一は、事後的平等主義との対比である。例3において、事後的に見れば、いずれの状況になろうともxはyよりも平等な結果になるので、事後的平等主義によれば、明らかにxがyよりもよいとされ、この例の評価判断は事後的優先主義と一致する。しかしながら、事後的優先主義は、Parfit (2000) が強調するように、平等それ自体に価値を置かず、常に事後的な結果が平等であるプロスペクトをそれが不平等であるプロスペクトよりもよいと判断するわけではない。Parfit (2000) によれば、優先主義における優先度のウエイトは、個人の厚生の評価を他人との相対的關係ではなく、その絶対的水準において評価すべきである。(p.104) 事後的平等主義と事後的優先主義の見解の相違は、前節に挙げた例2において鮮明に表れる。例2のyはいずれの状況でも平等な厚生水準を実現するので、すでに見たように、事後的平等主義はxよりもyをよいと判断する。これに対して、事後的優先主義では、それぞれの個人の厚生水準に応じてウエイトづけされたよさの尺度を集計するが、それによればxとyのいずれのプロスペクトも $w(1) + w(0)$ となり両プロスペクトは無差別である。このように、事後的優先主義は、wを集計する際に他の個人との相対的關係とは独立に行う点で事後的平等主義と決定的に異なる。

事後的優先主義に関する第二の論点は、プロスペクトに関する個人的よさの原則との兼ね合いである。先にみたように、各個人が期待厚生を最大化するとすれば、個人の観点からは、両個人ともに、プロスペクトyの方が、プロスペクトxよりも期待厚生は高く、したがって、yはxよりも好ましいと見なされる。したがって、事後的優先主義は、プロスペクトに関する個人的よさの原則に反するのである。

この事実から、事後的優先主義は、厚生主義 (welfarism) を脅かすものであり、功利主義とは地盤の異なる立場であるように見える。これに対して、Rabinowicz (2002) は、事後的優先主義においては、個人的よさの原則は、結果として得られた厚生配分に適用されるものであって不確実性を含むプロスペクトに対しては必ずしも適用されないという意味で限定された厚生主義の基盤は確保されているとした。

ここでプロスペクトに関する個人的よさの原則と厚生配分に関する個人的よさの原則が区別されていることに注意しよう。厚生配分に関する個人的よさの原則は次のように表される。

厚生配分に関する個人的よさの原則

2つの厚生配分が各個人にとって等しくよいものであるなら、それは社会において等しくよいと判断される。また、すべての個人において厚生配分が他方の厚生配分と少なくとも同程度によく、かつ、ある個人にとっては厳密によいならば、前者は後者よりよいと判断される。

しかしながら、いずれにせよ、事後的優先主義では、事前の段階で誰も望まないプロスペクトを支持する可能性があることは事実である。明らかなように、これは社会的評価判断において w による逓減的ウェイトを適用するからに他ならない。

第三の論点は、事後的優先主義が、一人の個人しか存在しない社会においてよさの個人的判断をよさの社会的判断の一致を破ることである。McCarthy (2008) は、これを重視し、事後的優先主義を否定する。実際、個人は、期待厚生が大きいプロスペクトをよいと評価するわけだが (Bernoulli の仮説)、社会にたった一人しか存在しない場合には、その評価判断がそのまま社会の判断となってしまうべきである。しかるに、事後的優先主義では、個人の厚生に対し、厳密に凹の増加関数 w を用いてウェイトづけをしながら社会的な評価判断をするので、一人しか存在しない個人の評価判断と必ずしも一致するとは限らない。例 3 において、たとえば、個人 2 がいなくなり、個人 1 のみの社会になったとしよう。個人 1 は、プロスペクト x より y の方がよいと判断するが、先の不等号が成り立つような w を用いた事後的優先主義による社会的な評価では y よりも x がよいと判断される。McCarthy (2008) は、この事実が事後的優先主義のもつ大きな困難であり、功利主義と比較した場合、事後的優先主義は功利主義に代わるべき優れた規準ではないと結論づけた。

一人の個人しか存在しない社会におけるよさの個人的判断と社会的判断の不一致は、先に論じた、プロスペクトに関する個人的よさの原則に反するという問題と同様に、 w による逓減的ウェイトの適用に起因している。

この問題に対する一つの解釈は、社会的意思決定者（政府）が、パターナリズム（温情主義）に基づいて事後的優先主義の評価判断を適用するというものである。Parfit (2000)

が強調するように、優先度のウエイトが、個人の厚生の評価を他人との相対的關係ではなく、その絶対的水準において設定されるならば、優先主義は、個人にとってのよさに対して、社会全体として個人的判断を超越した評価を与え、プロスペクトの各個人の厚生に限った場合でも状況によって異なる厚生水準の低い方に大きなウエイトがかかることを要請する。すなわち、厚生水準が低くなる状況を個人が軽視することを防ぐという意図を含ませることができる。この意味で、社会全体を代表する意思決定者のパターンリズム的な要素を見出すことができる。

もっとも、この解釈のもとでは、個人または諸個人を超越した社会の意思や意思決定者をどこに（あるいは誰に）措定するのか、また、それがどのように正当化されるのか、という問題が存在する。

McCarthy (2008) は、事後的優先主義は擁護できないとする一方、事前的優先主義は擁護可能であるとする。事後的優先主義とは異なり、事前的優先主義は、Diamond の例（前節の例 1）において顕著なように、各個人に公平なくじを与えることに価値を置く。例 1 では、結果においては、プロスペクト x もプロスペクト y も同じであるが、プロスペクト x では、個人 1 と個人 2 の期待厚生は $1/2$ で平等であるが、プロスペクト y では、個人 1 は期待厚生が 1 であるのに対し、個人 2 は 0 となり、高い厚生を得る機会が個人 1 に偏っている点で不平等である。この場合、事後的優先主義では、個人の期待厚生の平等・不平等には無関心であり、2つのプロスペクトは無差別と判断されるが、事前的優先主義では、事前的平等主義と同様に、プロスペクト x がプロスペクト y よりもよいと社会的に判断される。

よく知られているように、例 1 において、x を y よりよいと判断する評価関係は、期待効用の公理のうち強い独立性の公理 (strong independence axiom) を満たさない。強い独立性の公理によれば、状況 1 の結果（厚生配分）は、両プロスペクトにおいて同一であるので状況 1 を顧みることなく状況 2 だけで判断することができる。例 1 の場合、個人を匿名的に扱う限り、状況 1 の結果（厚生配分）は両プロスペクトの間で無差別であることをこの公理は要請する。しかし、事前的優先主義は、この要請に反する社会的評価関係を求めるのである。

これについて、さらに掘り下げて考えてみよう。以下の例 4 は例 3 におけるプロスペクト y をプロスペクト z に置き換えてプロスペクト x と比較するものである。

例 4

	プロスペクト x		プロスペクト z	
	状況 1	状況 2	状況 1	状況 2
個人 1	10	10	16	16
個人 2	10	10	5	5

例 4 において、事前の優先主義によれば、厳密に凹の増加関数 w に対して

$$2w(10) > w(16) + w(5)$$

が成立するならば、 x が z よりよいと社会的に判断されるだろう。

さて、プロスペクト y とプロスペクト z は、結果の厚生配分からみると、いずれの状況に落ち着いても一方の個人の厚生が 16 で他方の個人の厚生が 5 となる点で全く同じである。各状況の厚生配分に対し、同じ関数 w を用いて評価するとすれば、 $2w(10) > w(16) + w(5)$ が成立しなければならない。このように事後の優先主義に従えば、例 3 のプロスペクト y の事後的な厚生配分も例 4 のプロスペクト z と同様であるからプロスペクト x の事後的な厚生配分よりもよいと判断すべきことになる。それにもかかわらず、個人の期待厚生についてその水準に応じてウェイトを変える事前の優先主義は評価が異なり、 y は x よりよいと社会的に判断されるのであるから、(少なくとも同じ w による) 事後の優先主義の判断とは相容れない。これは、事前の優先主義が結果の状態にあまりに関心が薄いことを示していると言える。

実際、 y と z を直接比較する場合は、事後的な厚生配分は無差別な状況において公平なくじを提供するプロスペクトがよいと判断するものである。したがって、事後的な結果においては、いずれのプロスペクトを選んでも影響はない。 x と y との間での評価判断と、 x と z との間での評価判断は、事前の公平なくじの要請により、事後的な厚生配分から見るとまったく逆になっている。このように考えると、事前の優先主義は、事後的な結果に一定以上の配慮を求める立場に対して強い違和感を生ぜしめるものである。

4. レクシミン原則

Parfit (2000) は、Rawls の格差原則は、最悪の境遇にある人々を利することに絶対的な優先度 (absolute priority) を与えるという意味で、優先主義の極端なたちと位置づけている (p.116-7)。しかし、これは必ずしも説得的でない。Parfit (2000) は、優先主義で設

定するウエイトは、他の個人との相対的な関係とは独立に、個人の厚生 of 絶対的水準によって決まるとした。したがって、一つの厚生水準に1つのウエイトが(関数 w を通じて)対応していた。これに対して、格差原則あるいはマクシミン原則は、最低厚生水準に1のウエイトを与え、それ以外の厚生水準には0のウエイトを与えるというものであるが、最低厚生水準を同定するには相対的な関係において判断する以外にはない。仮に、最低厚生水準を、ある絶対的水準でとらえるなら、それを含まないプロジェクト同士は比較できないか、必ず無差別ということになってしまう。また、格差原則またはマクシミン原則を発展させた規準のレクシミン原則も、各プロスペクトにおいて個人の厚生水準の序列を明らかにする必要がある。したがって、マクシミン原則やレクシミン原則を上のようにとらえた優先主義の特殊な場合と考えることはできない。

以下では、レクシミン原則が、プロスペクトの社会的評価関係においていかなる定式化ができるかを考える。優先主義の場合と同様にして、レクシミン原則を事前的観点と事後的観点到に分けて考えてみよう。まず、事前的観点によるレクシミン原則では、各個人の期待厚生のうち最も低い期待厚生をプロスペクト間で比較し、それが高い方のプロスペクトをよいと社会的に判断するものである。例3についてみると、先の事前的優先主義の分析から明らかのように、プロスペクト y がプロスペクト x よりもよいとされる。

一方、事後的観点によるレクシミン原則を、事後的優先主義と同様に、各状況における厚生配分の社会的評価の期待値を考えるとすれば、次のようになる。すなわち、各プロスペクトにおいて、各状況の最も低い厚生水準を取り出し、それから最低厚生水準の期待値を計算し、それらをプロスペクト間で比較し、期待値が高い方のプロスペクトをよいと社会的に判断する。例3についてみると、状況1が生じたとき、プロスペクト x においては、いずれの個人も10の厚生を得る一方、プロスペクト y において最低の厚生水準を得るのは個人2であり、その厚生水準は5である。レクシミン原則を状況1が実現した場合にあてはめれば、プロスペクト y よりもプロスペクト x の方がよい。状況2についても同様に考えるとき、プロスペクト x がプロスペクト y よりもよいことになる。したがって、この場合、状況1と状況2のいずれの状況が生じて、プロスペクト x の最低水準の厚生がプロスペクト y の最低水準の厚生よりもよくなるので、プロスペクト x がよいと判断されることになる。ここでは、状況1と状況2の生起する確率の大きさは問題にならず、期待値を計算するまでもない。

この最低厚生水準の期待値の比較によるレクシミン原則の問題点を浮かび上がらせるた

めに次の例 5 を考える。例 5 では、2 人の個人が得る厚生は下表のようになるとする。状況 1 と状況 2 の生起する確率はそれぞれ $1/2$ であるとする。

例 5

	プロスペクト x		プロスペクト y	
	状況 1	状況 2	状況 1	状況 2
個人 1	10	10	7	12
個人 2	15	5	12	7

プロスペクト x の状況 1 において最低の厚生水準は 10 で状況 2 においては 5 である。したがって、プロスペクト x について、各状況の低い方の厚生水準の期待値は、7.5 である。他方、プロスペクト y については、最低の厚生水準はいずれの状況においても 7 である。したがって、プロスペクト y について各状況の低い方の厚生水準の期待値は 7 である。したがって、両者の比較の結果、プロスペクト x の方がプロスペクト y よりもよいと社会的に判断される。

しかしながら、この考え方では、両プロスペクトを通じて最悪の結果が生じる可能性を排除していない。実際、プロスペクト x では、状況 2 が生じれば、個人 2 の厚生水準は両プロスペクトを通じて生じうる厚生水準のなかで最も低い 5 である。最悪の状況を含むプロスペクト x は状況 2 の生じる確率が、相対的に低い故に、y よりもよいと社会的に判断されるのである。

ここで、選択肢がプロスペクトではなく、確実に実現する厚生配分である場合にいったん立ち返ってみよう。レクシミン原則の特徴を功利主義との対比で考えてみる。功利主義は、厚生水準の低い個人がいてもその境遇に陥る個人の数が少なく、他の大多数の個人が高い厚生水準を享受することができるならば、他のいかなる厚生配分に比べても低い厚生水準の個人を含む状況を是とすることが十分ありうるというものであった。他方、マクシミン原則あるいはレクシミン原則は、他の大多数の個人がどれほど高い厚生水準に達していようとも、厚生水準がすべての厚生配分のなかで最も低くなる個人が存在することを避けようとする。そのような個人の数や割合がどんなに少なくとも配慮の対象とするのが、マクシミン原則やレクシミン原則の立場である。

このレクシミン原則の精神を徹底させるならば、不確実性を含むプロスペクトの評価に

臨む場合、最悪の状況に陥る個人が存在してしまう可能性をできる限り回避することを目指すだろう。この観点に基づいたレクシミン原則は、各状況の最低厚生水準の期待値を最大化することにはつながらない。先の例から明らかなように、そのような規準では当該状況の実現する確率が小さいということ、あるいは他の場合に大きな厚生水準を実現できるという事情から最悪の境遇に陥る個人が存在する可能性を容認するからである。

我々が提唱するレクシミン原則は、プロスペクトの社会的評価を具体的に以下の手順で考える。まず、各プロスペクトのなかで各状況を通じて最も低い厚生水準を選ぶ。その際、同一の状況のなかに最も低い厚生水準を得る個人が2人以上存在する場合は、最低の厚生水準を得ているすべての個人のあいだで一人ずつ1番目、2番目……と序列をつけてゆく。そして、異なる状況のなかに最低の厚生水準を得る個人が存在するならば、そのような状況の確率をすべて足し合わせるとそれが当該プロスペクトの最低厚生水準を実現する確率である。そこで得られた当該プロスペクト (x とする) の最低厚生水準の値を $v_1(x)$ とし、プロスペクト x において $v_1(x)$ が実現する確率を $\pi_x(v_1(x))$ としよう。すべてのプロスペクトのなかから、 $v_1(x)$ が最も大きいプロスペクトを選び、これを v_1^{\max} とする。次に、 v_1^{\max} と等しい最低厚生水準をもつプロスペクトが複数存在する (すなわち、 $v_1(y) = v_1^{\max}$ となるプロスペクト y が存在する) 場合にはそれが実現する確率 $\pi_x(v_1^{\max})$ の最も小さいプロスペクトを選び、この確率を $\pi^{\min}(v_1^{\max})$ とする。また、 $\pi^{\min}(v_1^{\max})$ をもつプロスペクトが複数ある場合には、今度はそれらのプロスペクトにおいて2番目に低い厚生水準を比較の対象とし、その厚生水準が最も高いプロスペクトを選ぶ。そして、同一の厚生水準のプロスペクトが複数ある場合には、それが生じる確率の低いプロスペクトを選ぶ。このような方式で、プロスペクトの社会的評価関係を定めてゆく (このレクシミン原則のより厳密な定式化は付録を参照されたい)。

このレクシミン原則を例5に適用すれば、容易にわかるように、プロスペクト y がプロスペクト x よりもよいと社会的に判断される⁹⁾。数値を当てはめると、 $v_1(x) = 5$ 、 $v_1(y) = 7$ であるので $v_1^{\max} = 7$ となる。

5. 結語的覚え書き

事前的観点と事後的観点の比較考察は、平等を図る観点として古くから論じられている、機会の平等と結果の平等の対比と類似している。事前的観点は、個人の期待厚生配分のあり方を考察するが、事後の結果における配分状態に対しては直接の関心を払わない。

これとは対照的に、事後的観点は、個人の期待厚生が事前の段階でどのような状態にあるか、たとえば不公平があるか否かということに対して配慮しない。その帰結として、事前の観点によるプロスペクトの評価関係が事後的観点による評価関係と相容れない場合があることは上で考察したとおりである。

事前の観点と事後的観定のいずれが優れているかの答えは容易には見いだせない。個人が受け止めるよさの持つ性格に応じて、いずれかがよりふさわしい観点であると見なされることになる。生を送るために必要と社会的に認められている基本的な財に基づくよさの配分を考えるとときには、事後的な結果を重視すべきである。他方、必要性を超えた財に基づくよさの配分に対しては、事前の段階での公平や平等をより重視すべきである。

我々は、プロスペクトに関するレクシミン原則を考察したが、よさの尺度を厚生に代えて、たとえば Rawls (1971) のいわゆる社会的基本財 (primary social goods) を念頭に置くならば、レクシミン原則は事後的観点において考えるのがふさわしい。その場合、レクシミン原則は、最悪の事態に陥る個人が存在する可能性が最小化されるものから評価してゆくというのが適切な考え方である。

〈付 録〉

我々のレクシミン原則の解釈を形式的にまとめると以下ようになる。ただし、ここでは、本文の説明とは異なり、いずれかのプロスペクトで実現可能な厚生水準をそれぞれのプロスペクトで実現する確率のベクトルによって比較するかたちに定式化する。

各プロスペクトについて、各状況の個人が享受しうる厚生水準を昇冪の順に並べたベクトルを与え、そのベクトルに対して、段階的に操作を加えることを考える。

第一段階：プロスペクト x の状況 s の厚生水準を昇冪の順に並べたベクトルを次のように定義する。

$$^{(1)}g^s(x) = (^{(1)}g^s_1(x), ^{(1)}g^s_2(x), \dots, ^{(1)}g^s_n(x)) \quad x \in X$$

$$^{(1)}g^s_1(x) \leq ^{(1)}g^s_2(x) \leq \dots \leq ^{(1)}g^s_n(x)$$

ここで、 $^{(1)}g^s_i(x)$ は、昇冪の順で i 番目に位置する厚生水準を表す。X の各プロスペクトの各状況の最も低い厚生水準 $^{(1)}g^s_1(x)$ を各プロスペクトの各状況のあいだで比較して、そのなかで最も低い厚生水準を取り出し u_1 とする。

第二段階：次に、それぞれの $^{(1)}g^s(x)$ から u_1 に等しい $^{(1)}g^s_1(x)$ を除いたベクトルを作り $^{(2)}g^s(x)$ とする。

$$^{(2)}g^s(x) = (^{(2)}g^{s_1}(x), ^{(2)}g^{s_2}(x), \dots, ^{(2)}g^{s_h}(x)) \quad x \in X$$

$$^{(2)}g^{s_1}(x) \leq ^{(2)}g^{s_2}(x) \leq \dots \leq ^{(2)}g^{s_h}(x)$$

$$h \leq n$$

ここで、ベクトルの要素の数 h は、各 $^{(2)}g^s(x)$ で異なりうることに注意しよう。

今度は、 $^{(2)}g^s(x)$ について、各プロスペクトの各状況の最も低い厚生水準 $^{(2)}g^{s_1}(x)$ を各プロスペクトの各状況のあいだで比較して、そのなかで最も低い厚生水準を取り出し u_2 とする。

以下、この操作を繰り返してゆき最終的に

$$u = (u_1, \dots, u_m)$$

を得る。ここで、 $u_1 \leq \dots \leq u_m$, $n \leq m \leq n \times t$ である。

各プロスペクトについて、各 u_k が生じる状況 s のすべてについてその確率をすべて合計するならば、それは各プロスペクトで u_k が実現する確率とみなすことができる。プロスペクト x で u_k が実現する確率を $q_k(x)$ ($0 \leq q_k(x) \leq 1$) とすると、プロスペクト x から導かれる各厚生水準の実現確率のベクトルを $q(x) = (q_1(x), \dots, q_m(x))$ と書くことができる。ここで、いずれの状況においても u_k という厚生水準が実現しないならば $q_k(x) = 0$ である。

以上の設定のもとで、我々のレクシミン原則は次のようにまとめることができる。まず、比較対象となる2つのプロスペクトにおいて生じうる厚生水準の最も低い水準、つまり u_1 の確率 $q_1(x)$ をプロスペクト間で比較し、 $q_1(x)$ の低い方のプロジェクトを選ぶ。最低の厚生水準が当該プロジェクトにおいて実現しえないとなれば $q_1(x) = 0$ で、言うまでもなくそれが最も低い値になる。 $q_1(x)$ が2つのプロスペクトの間で等しい場合には、 $q_2(x)$ を比較してその低い方のプロジェクトを選ぶ。さらに、 $q_2(x)$ が等しい場合には $q_3(x)$ についてみてゆくという方式でプロスペクトの評価関係を形成してゆく。

注

- 1) Parfit (2000) を参照せよ。
- 2) 外生的状況とは、たとえば、コインを投げて裏か表が出ることであり、結果は、それに応じて定められた賞金額である。当然、賞金額をいくらに定めるかにより結果は異なる。
- 3) 拙稿 (2006) において、betterness relation に評価順序という訳語を当てているがこれは完備性を備えているとは限らないので不適切であった。
- 4) この原則は、Broome (1991) に基づくが、いわゆる個人間加法定理 (Interpersonal Addition Theorem) の中心的仮定の一つである。(Rabinowicz (2002) p.11)

- 5) これと同様の例は、平等主義と優先主義の違いを明らかにするために、Broome (1991) により挙げられた。(表 22 : p.185)
- 6) Rawls (1971) の功利主義批判は、いかえれば、功利主義は他人の利益のためにある者が犠牲になることを要求するというものである。これに対して、Arrow (1973) は、格差原則 (マクシミン原則) は、境遇のよい者が、境遇の悪い者のために犠牲になるべきことを含意しているように思われるとし、Rawls (1971) の功利主義批判に対して疑問を呈している。Arrow (1973) の指摘と同様のことが、優先主義にも当てはまる。
- 7) Rabinowicz (2001, 2002) および McCarthy (2006, 2008) を参照せよ。
- 8) これら 2 つの優先主義のうち、事後的優先主義について、McCarthy (2008) は厳密に定式化し、基本的な諸前提のもとで、3 つの仮定、すなわち、Pigou-Dahlton の条件、社会的評価関係が期待効用公理を満たすこと、および拡張された分離可能性によって特徴づけられるとした。これらの条件の詳細な吟味および事後的優先主義の導出については McCarthy (2008) を参照されたい。
- 9) 我々のレクシミン原則も、例 5 でわかるように、プロスペクトに関する個人的よさの原則を満たしておらず、また、一人の個人しか存在しない社会における良さの個人的判断と社会的判断の不一致を満たさないことは容易に想像される。これらの点については、事後的優先主義に関して行ったのと同様の考察が当てはまる。

引用・参考文献

- Arrow, K. E. (1973), "Some ordinalist-utilitarian notes on Rawls' s theory of justice", *Journal of Philosophy* 70 : 245-263.
- Broome, J. (1991), *Weighing goods*. Oxford : Blackwell.
- Diamond, P. (1967), "Cardinal welfare, individualistic ethics, and interpersonal comparisons of utility : comment", *Journal of Political Economy* 75 : 765-66.
- McCarthy, D. (2006), "Utilitarianism and prioritarianism I", *Economics and Philosophy*, 22 : 335-63.
- McCarthy, D. (2008), "Utilitarianism and prioritarianism II", *Economics and Philosophy*, 24 : 1-33.
- 森 統 (2006) 「平等主義と優先主義」『上武大学ビジネス情報学部紀要』第 5 巻第 1 号 : 117-130.
- Parfit, D. (2000), "Equality or priority ? ", In Clayton, M. and A. Williams (eds.) *The Ideal of Equality*, Basingstoke : Macmillan : 347-86.
- Rabinowicz, W. (2002), "Prioritarianism and uncertainty : on the interpersonal addition theorem and the priority view", In Egonsson, D., Josefsson, J., Petersson, B. and T. Rønnow-Rasmussen (eds.) *Exploring Practical Philosophy : From Action to Values*, Aldershot : Ashgate.
- Rabinowicz, W. (2002), "Prioritarianism for prospects", *Utilitas*, 14 : 2-21.
- Rawls, J. (1971), *A Theory of Justice*, Cambridge : Harvard University Press.
- Tungodden, B. (2009), "Equality and priority", In Anand, P., Pattanaik, P. K. and C. Puppe (eds.) *The Handbook of Rational and Social Choice : An Overview of New Foundations and Applications*, Ch. 17 : 411-32.